表参道にて

10月17日

Sudden Fiction Project

高階經啓
hirotakashina

10月17日のおはなし「表参道にて」

　以前に紀伊国屋があったあたりを通り過ぎ、もうすぐ表参道の交差点というところで、ばったり彼女に再会する。わたしがまず彼女に目をとめ、立ち止まり、そうして目が離せなくなっているわたしに気づいて彼女がこっちを見る。怪訝な顔つきをしていた彼女の顔に驚きと、狼狽と、それから何かを悲しむような表情が浮かぶ。何を悲しんだのか、わたしには瞬時にしてわかってしまう。20年の歳月を悲しんだのだ。わたしの身体に肌に顔つきに刻み込まれて彼女の身体には影響を及ぼさなかった20年の歳月を。

　わたしたちは20年ぶりにあった旧友がするように挨拶を交わし、20年前によく訪れたように大坊のコーヒ–を飲みに行くことにする。2階に上がり窓際の席に着き、20年前同様に香り立つコーヒーを飲む。何を聞けばいいのだろう。いまはどこに住んでいるの？　仕事は？　ご家族は？　当時の仲間の消息を知っている？　そんな当たり障りのない話をしようかと思うが、それはあまりに嘘臭い。聞くしかないだろう。どうしてあなたは年を取らないの、と。

　そう。彼女は全く年を取っていない。学生時代のまま、何も変わっていない。変わったのは時代に応じたメイクやヘアスタイルやファッションであって、いま目の前にいる彼女は当時のままの姿だ。いや。彼女がその頃に生んだ娘だといわれたら信じたかも知れない。お母さんにそっくりなのね、と言って。

　話を切り出しあぐねている私の様子を見かねたのか、彼女が言う。ねえ覚えてる？　卒業旅行のこと。もちろん忘れるわけがない。当時一番仲の良かった彼女と出かけた最後の旅行。国内を旅行するより海外旅行の方がやすいと言われ始めた時期だったけれど、わたしたちはあえて国内旅行を選んだ。二人ともまだ訪れたことがなかったという理由で、東北地方をじっくり回ることにしたのだ。

　あの丸いブロックのこと覚えている？　と彼女が言う。それも覚えている。旅行の終盤、わたしたちは遺跡を訪ねて山に入っていった。その途中、奇妙な丸い石を見つけたのだ。それは妙に整った形で、いかにも人工物めいていた。やわらかい粘土でできた円盤状のブロックを真ん中のところでぐっと押して、なだらかな円錐形の器にしたような形。前衛芸術家が気の向くままに削り、磨き上げた石の彫刻のようにも見えた。

　彼女がそれを拾い上げ、わたしたちはその形の不思議さに盛り上がった。自然にできたのだろうか？　人工のものなのだろうか？　そんなことを話し合いながら。そこから少し上がったところでわたしがカメラを取り落とした。それを追ってわたしたちは道から外れて斜面を下りていき、それを見つけたのだった。カメラが落ちていたすぐそばに明らかに人工的に積み上げたブロック塀のようなものがあったのだ。けれどそれは塀などではなかった。ひとつひとつのブロックはさっき彼女が拾ったあの丸い石でできていた。それが無数に積み上げられていたのだ。わたしたちは茫然とそれを眺め、やがて気がついた。これはまだ見つかっていない遺跡なのではなかろうかと。

　あのときあなたは届けなきゃいけないって言ったよね。と20代にしか見えない彼女が言う。そう。わたしは、届けなければならない、彼女もその石を持って帰るのはまずいだろう、と言った。でもその忠告を聞かなかった。うん、怒ったよね。そう、絶対にこれを持って帰るんだ！って怒った。旅行、めちゃくちゃにしちゃってごめんね。確かにその後わたしたちはギクシャクし、旅行の後は謝恩会で顔を合わせたきりもう二度と会うことはなかった。でも、20年前の旅行の終盤が台無しになったことをいまさら謝られてもどうしたらいいのかわからない。彼女が話したかったのはこのことなのだろうか。

　あれから年を取らないの。生理不順の話でもするように淡々と彼女が言う。たぶん、この石のせい。そう言って彼女はコーチのトートバッグからあの石を取り出す。久しぶりに見る石にわたしは動揺する。石のせい？　どういうこと？　彼女は、よくわからないけど、と首を振り、でも

[illegible]たぶん、と言う。たぶん、何？　保存食よ。その石が？　ううん違う。この石の中に彼らの食べものが、食べものみたいな何かがはいっているの。彼ら？　それには答えず彼女は言う。缶詰みたいなものかな。そのこととあなたが年を取らないこととどう関係するの？　わからない、わからないけど、たぶんここに封じこめられた何かがわたしの時間を止めてしまったの。そう言うと彼女は柔らかな微笑みを浮かべる。20代にしか見えない顔に、とても年を経た人のような微笑みを浮かべる。

（「缶詰」ordered by izumi-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro）

感謝の言葉と、お願い＆お誘い

　Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？　もしも気に入っていただけたならぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブクログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

　「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそこのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただけると大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできるようですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じでご利用いただければ幸いです。

　現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→公開中の作品一覧

　SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「Sudden Fiction Project Guide」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

　ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、Facebookページなどに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

　読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

　10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「急募！お題　この秋Sudden Fiction Project開催します」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！　はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

　こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひご一緒に盛り上がってまいりましょう。

表参道にて

http://p.booklog.jp/book/35354

著者 : hirotakashina
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/35354

ブクログのパブー本棚へ入れる
http://booklog.jp/puboo/book/35354

公開中のSudden Fiction Project作品一覧
http://p.booklog.jp/users/hirotakashina

電子書籍プラットフォーム : ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社paperboy&co.